第６課 傲慢から破壊へ

【暗唱聖句】

「神は時を移し、季節を変え、王を退け、王を立て、知者に知恵を、識者に知識を与えられる」ダニエル2:21

【日曜日・ベルシャツァルの宴会】

「…ベルシャツァルは、その父ネブカドネツァルがエルサレムの神殿から奪って来た金銀の祭具を持って来るように命じた。王や貴族、後宮の女たちがそれで酒を飲もうというのである…こうして酒を飲みながら、彼らは金や銀、青銅、鉄、木や石などで造った神々をほめたたえた」ダニエル5:2～4

ネブカドネツァルはエルサレムを滅ぼしたとき、神殿から金銀の祭具を奪って彼の仕える神の部屋に保管していました。孫のベルシャツァル（聖書では父ネブカドネツァルとありますが、この時代、祖先を父と表現していたことによる。彼の父親は新バビロニアの王ナボニドゥス）は、1000人もの貴族を招いて大宴会を催した時、その金銀の祭具を持ってこさせ、その聖なる器から酒を飲み、そして「金や銀、青銅、鉄、木や石などで造った神々をほめたたえました」。これは神様に対する激しい冒涜行為です。金や銀や銅などで造られた神々は、自らの力や繁栄を誇る象徴です。ネブカドネザル王が見た最後には砕け散っていく像の金属とも似ていることから、歴史は神様がご支配されていることを忘れ、まるで自らの力によって歴史を動かしているかのようなごう慢さと、神様への軽視によって、やがて崩壊するバビロンの最後の状態をも表していることがわかります。そして、ここで描かれているバビロンは、まさに黙示録に描かれている終末時代のバビロン、つまり現代の姿をも表しているのです。

【月曜日・招かざる客】

「その時、人の手の指が現れて、ともし火に照らされている王宮の白い壁に文字を書き始めた。王は書き進むその手先を見た。王は恐怖にかられて顔色が変わり、腰が抜け、膝が震えた」ダニエル書5章5、6節

ベルシャツァルが偶像の神々をほめたたえていたそのとき、目の前になんと指が現れて、十戒の板に主が文字を書き込まれたように、白い壁に文字を書き始めたのです。王は「恐怖にかられて顔色が変わり、腰が抜け、膝が震え」ました。しかし、その白い壁に書かれた文字の意味がわかりません。そこでネブカデネザル王が行ったように、祈祷師、賢者、星占い師などを連れて来させて、その意味を解き明かせようとします。そして、解き明かすことのできた者に、褒美として王族の印である「紫の衣」、高い身分を表す「金の鎖」、さらに王国における第三の地位を与えると約束しました。しかし、ネブカドネツァルの夢の解き明かしと同様に、彼らはそれを解き明かすことはできませんでした。「それゆえ、見よ、わたしは再び驚くべき業を重ねて、この民を驚かす。賢者の知恵は滅び、聡明な者の分別は隠される」（イザヤ29:14）にあるように、神様は人間に解き明かすことができないようにされたのです。しかし、神様を信じる者は、それを知り、理解することができます。その際たるものが、人間の救いに関する福音のメッセージでしょう。

【火曜日・王妃の登場】

「お国には、聖なる神の霊を宿している人が一人おります。父王様の代に、その人はすばらしい才能、神々のような知恵を示したものでございます。お父上のネブカドネツァル王様は、この人を占い師、祈祷師、賢者、星占い師などの長にしておられました」ダニエル書5章 11節

指が壁に書いた文字の意味を誰も解き明かすことができないでいると、宴会場で起きた騒動を聞きつけたペルシャツァルの妻が、「お国には、聖なる神の霊を宿している人が一人おります」と、ダニエルのことを告げます。ネブカドネツァル王のときに、ダニエルはすばらしい才能、神々のような知恵を示したことがあったことを彼女は覚えていました。そして、その霊的力と知恵のゆえに、ネブカドネツァル王はダニエルを高く評価し、占い師や祈祷師たちの長にたてたのでした。ペルシャツァルもダニエルのことを全く知らないわけではなかったでしょう。しかし、すでに現役を退いていた可能性が高いダニエルのことが頭には無かったのかもしれません。あるいは、エルサレムの神殿から奪った金銀の盃で酒を飲んでいたことからもわかるように、ダニエルの神様に馬鹿にしていたので、ダニエルを呼ばなかったのかもしれません。

【水曜日・秤にかけられ、不足と見られた】

「しかし、父王様は傲慢になり、頑に尊大にふるまったので、王位を追われ、栄光は奪われました…ベルシャツァル王よ、あなたはその王子で、これらのことをよくご存じでありながら、なお、へりくだろうとはなさらなかった…そのために神は、あの手を遣わして文字を書かせたのです。」ダニエル5：20～24

ダニエルは恐れることなく、ベルシャツァルの犯した3つの過ちを指摘します。まずネブカドネザル王が傲慢のゆえに獣のようになってしまったことから何も学んでいないこと。二つ目に、神殿の器から酒を飲み、手で作った偶像をたたえたこと。そして、命と行動の一切を手中に握っておられる神様を畏れ敬おうとはしなかったこと。

これらの王の過ちを指摘したあと、指で書かれた文字の意味を解き明かします。そこに書かれてあったのはアラム語で、「メネ、メネ、テケル、パルシン」という言葉でした。その意味することは、ベルシャツァルにもわかっていたはずです。その文字の意味は、メネが「数えられた」、ラケルが「量を計られた」、パルシンが「分けられた」です。それが何を意味しているのか、ダニエルは隠すことなく語ります。「メネは…神はあなたの治世を数えて、それを終わらせられた、テケルはあなたは秤にかけられ、不足と見られた、パルシンは、王国は二分されて、メディアとペルシアに与えられる」という意味でした。（ダニエル5：26～28）

【木曜日・バビロンの滅亡】

「これを聞いたベルシャツァルは、ダニエルに紫の衣を着せ、金の鎖をその首にかけるように命じ、王国を治める者のうち第三の位を彼に与えるという布告を出した。その同じ夜、カルデア人の王ベルシャツァルは殺された」

ダニエル書5章30節

ベルシャツァルは、ダニエルの解き明かしが正しいことを認めました。そのことはダニエルに褒賞を与えたことからもわかります。しかし、その日の夜に殺されてしまいます。ベルシャツァルは回心する機会はありました。しかし、享楽を愛する心と高慢な心が、それを妨げました。特に、祖父ネブカドネザルの失敗は大きな教訓となっていたはずです。ちなみに、父のナボニドゥスは一足早く逃げたために助かったようです。このようにして夢で見た預言のように、金の頭だったバビロンは、銀の国であるメド・ペルシャによって滅ぼされたのでした。歴史はすべて神様がご支配されているのです。